

---

# 黄色の爪

もとじろう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黄色の爪

### 【著者名】

N4793A

もとじいわつ

### 【あらすじ】

僕と彼女についての間にか生じてしまった隙間。ぼんやりとした大学生活と恋愛の中で、僕はやっとそれに気付いた。

大学から少し離れた海沿いのロッジ風の喫茶店で、僕らは足を休めていた。大きなファンが天井で冷たい空気をかき混ぜている。店内には低く音楽がかかっていた。けれど、その曲と曲の合間に訪れる静寂が僕には億劫だった。彼女はアイスコーヒーのグラスに付いた水滴を指で拭い落としている。

「やっぱりそうみたい」

僕には彼女の退屈を紛らすこともできない。ただ気まずい時間を打破するだけの話題を考えつこうと窓の外を眺めていた。そのためぼんやりしていた僕はもう一度彼女に聞き返した。

「何が」

彼女は少し口を尖らせてから、アイスコーヒーに一口だけ口をつけて答えた。

「空気が合わないの」

僕はわけがわからず目を丸くし、クンクンと周りの空気を嗅いでみる。その様子に彼女は少し呆れたように笑い、向かいに座る僕に顔を寄せてきた。ゆるいウエーブのかかった長髪の一束が、彼女の頬にかかる。

「日本の空気が、ね」

彼女はゆっくりとその言葉をつむいだ。僕は映画のワンシーンを思い出す。美人にしてやられた時の、脇役の間抜け面。誰があんたなんかと、つてスラングで言い放たれる。言い放たれる瞬間まで気付かずに。そうして脇役は、美人の隣から引き落とされるのだ。僕はでもまだ彼女を信じてすがりながら言つ。

「何が。 どういうことだよ」

彼女は驚いている僕に飽きたのか、はたまた理解できない僕に呆れたのか、目を伏せて自分の長い髪の毛先をいじり始める。伏せた長いまつげが余裕あり気で、僕には少しうらめしく見える。

「私が退屈なのは、日本にいるせい。それがこの前の旅行でわかつたの」

彼女は夏休みに一人でブラジルに旅行に行っていた。僕は集中講義を取つていたし、ブラジルになんて興味がない。だから、彼女に行つてきたら、と軽くかわしたあの旅行だ。もとより、彼女はどこにでも一人で行つてしまつ。なんの物怖じもしない自由でかっこいい女だ。僕はだから軽くかわした。そしたら今日はこんなことを言う。僕はいつも理解に苦しむ。

「だからってどうしようもないじゃん」

僕はすねて、物を知つたつもりでいる子供のような返答をした。でも、その判断はできるくらいは大人で、未成熟な自分を感じた僕は自分が恥ずかしくなつた。

「なんか君の口ぶりだと、もうすでに日本を出て行きたいように聞こえるよ」

僕が取り繕うように言つと、彼女はふふっと楽しそうに声をもらして笑つた。

「うん、もう出て行く」

また僕は驚いた。それはそうだ。さつきまで海辺を、来期の講義は何をとろつかなんて浮かない顔して歩いていて、最後には僕と同じ講義にするつて約束していたんだから。しかし、彼女は嘘は言わないし、なにより気分屋であつたから僕は信じないわけにはいかない。

「いつ決めたんだよ」

僕は声を荒げてしまい、店員と他の客の視線を伺つて咳払いした。彼女は特に気にした様子もなく、窓のほうに自分の手をかざしマニキュアの輝きを楽しんでいた。さすがに僕も頭にきて、恨みがましい視線を彼女に送る。

「いまさつき」

僕の視線なんていとも簡単に擦り抜けて、彼女は微笑んで言つた。どうしてそんなに笑えるんだ。

「大切なことを一人でさつさと決めるなよ。」

僕は憮然とした表情だったのだろう。彼女はストローの入っていた袋のごみを爪先ではじいて、少し眉をひそめた。

「でも私の事だから」「

彼女が表情を曇らせて、ぽつりと言い放った。沈黙の中、ボサ・ノヴァの音に混じって、コップに入った氷が涼しい音を立てて崩れる。

そう言われたら僕に出る幕はなくなってしまう。一緒に笑いあつた思い出さえも色味をうしなつていいくようだ。でも、僕と君がともにいて、これから君の楽しい人生を保障できるほど僕には力もないし、今はまだこれからそうなる自信もない。

「ねえ、和宏。夏休みの最初さ、動物園行つたの覚えてる？」

喫茶店を出た頃には、だいぶ日が傾いて風が冷たくなっていた。風が、ほてつた頬の温度を下げていく。僕らはもう一度浜辺に出た。交わす言葉は少ない。海水浴場を通りかかる。時期はずれの海水浴場では、元気のないやしの木が短い葉っぱを風に揺らしていた。海水浴場を活性化しようと無理やり暖かいところから連れてこられた木。場違いだ。

「…うん」

僕は何も言わずごんごん浜辺に近づいていった。彼女もついてきたようだ。横目で見た彼女は、夕暮れの光に照らされて曇った顔をしていた。風にあおられる長い髪を耳にかけなおしている。

僕は足元にあつた小石を拾つて海に投げた。着水した音は波の音にかき消されたらしい。振りかぶった腕にかすかな感触が残るだけだった。

「あそこにいたさ、なんて言つたつけ？ オーストラリアに住んでて、穴掘つて地下に住んでるやつ。もさつとしてるの」

彼女は砂浜に丸くなつて座り、へんてこな動物を描いている。波打ち際のぬれた砂は、彼女の指が描く線を残して行く。僕はしばし

頭をひねり、結局彼女の言葉だけを頼りに名前を探し当てる。

「…フレーリードッグ」

「彼女は「くくくとうれしそうに何度もうなずいた。

「あれがさ、とぼけた顔してて可愛かったよね」

立ち上がつて手についた砂を払つと、また歩き出した。彼女の表情が見えない。

「あの日は暑くてさ、日本より暑ことひに住んでるくせに動物がぐつたりして…」

僕たちは動物園の話をしながら、テトラポットをよじ登り、港の見える防波堤に上がつた。いつになく饒舌な彼女に、僕は次に来る別れを理解する。あまり彼女は思い出話をしない。柄にもない。

彼女は防波堤を港のほうに歩き、僕はそのちょっと後ろをついていった。いつもの距離だ。僕は彼女の後ろを歩くのが好きだつた。彼女の、後ろで組んだ指先の爪がきれいな黄色だつたことにやつと気付く。今日一日彼女といたのにも関わらずだ。ああ、そうだ。それで僕は理解した。一緒にいた時間はきっと誰よりも多かつたのに、僕は見落としていたのだ。たとえ小さうことであつたとしても、なにかしら彼女に影響を与えてはいるはずだ。けれど、今まで気付かなかつた。もしかしたら見てはいたのかもしれない。だけど、彼女のことをほかの誰よりも知りたいという願望が、ちいさな変化を追いきれず、逆に僕が知る事を恐れてしまい、諦めてしまった。僕には彼女を理解できないのかもしれない、と。

「楽しかつた。…絶対忘れないから」

彼女は一瞬だけ振り返つた。それを追つた僕は目の端で、彼女の目が光つたのを捉えた。

「…忘れちゃえば」

僕は精一杯強がる。別れを惜しむ気持ちと彼女への感謝や謝罪が、すっと胸に広がつていく。彼女は黙つたまま海を見ている。僕は深呼吸した。

「行こう」

この海のずっと向こうに彼女の目指すブラジルがあつて、彼女はそこへ渡つて行つてしまつ。ブラジルは彼女の希望の地だ。そしてさつきまでの僕の絶望の地だつた。しかしながら、彼女自身も不安や悲しみを持つてゐる。それが僕にとっての救いだつた。

寂れた港の駐車場近くの、物産館と名づけられた小さな店に入る。中はちょっとだけ評判のジェラードショップがあつて、その脇では地元の海産物とさしてかわいくもない僕らの地元のPRキャラクター「グッズ」が売られていた。彼女はそのキャラクターを手にとって、ぶざいくと言つて笑い、頭をつぶしてみせた。

「その爪の色、きれいだね」

「ありがとう」

彼女は目を伏せて少し照れたそぶりを見せる。

そのあと、僕らは手を振つて別れた。

「ありがとう」

「ありがとう」

僕はキャラクターの白と彼女の爪の黄色のコントラストをほめた。

あくる日、講義を終えて自分の部屋に帰つてくると、ポストの中に妙に膨らんだ小包が押し込まれていた。手に取るとエアパッキンの感触。しかもエアメールだ。そして、見慣れた筆跡。僕は急いで鍵を開け、靴を脱ぐのももどかしくらい急いでさみに手をかけた。中から出てきたのはCDと一枚の紙切れだつた。

和弘、元氣してる？　こつちで注目のボサ・ノヴァの新人を見つけたからCD送るね。日本ではかなりレアだよ。

たつたそれだけ。

「自分の近況はなしかよ」

僕は部屋の壁にもたれながら小さい紙切れに言つてやつた。

「ばーか」

口元が自然と緩む。誰も見ていやしないのに、僕は右手で頭をかいた。僕はその後今来た道をひたすら戻る事になる。遠く異国の方にいる、かつこいいあの人に手紙を書く必要があるのでだから。

(後書き)

はじめまして、もとじいひつです。読んでくださってありがとうございます。何かご感想等ありましたら、一言でも良いので書き込んでください。どうれしいです。これから執筆していく上での糧になるので、よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4793a/>

---

黄色の爪

2010年10月8日15時11分発行